

2024年12月10日
グリーンコープ
生活協同組合連合会
第三十二期
臨時総会

新たな産直びん牛乳事業が始動します

一次産業・農業と連帯・共生する「新しい産直」を創り
安心・安全な食べものの生産を守り
それらが生産される地域の再生に取り組みます。



2024年12月10日、グリーンコープ生活協同組合連合会の第三十二期臨時総会が開催され、すべての議案が承認・可決されました。第一号議案で牛乳びん不足事故に伴う総括について、第二号議案で新たな産直びん牛乳事業の価値と進捗状況についての審議が行われました。概要を報告します。



グリーンコープミルク
新産直びん牛乳工場



耶馬溪ファーム
1,000頭規模の酪農場



TMRセンター
完全混合発酵飼料の製造工場

興生の時代

みどりの地球を
みどりのままで

連合会臨時総会報告

■発行：グリーンコープ
 生活協同組合連合会理事会
 ■編集：共生の時代・編集部
 〒812-8561
 福岡市博多区博多駅前一丁目5番1号
 博多大博通ビルディング3階
 TEL092（481）7923
 FAX092（481）7876
<https://www.greencoop.or.jp/>

会長あいさつ



グリーンコープ生協
連合会 会長
日高 容子さん

グリーンコープは、酪農生産者と「真の産直関係」をつくる新たな産直びん牛乳の事業を進めています。2023年10月の共同体臨時社員総会で、一般社団法人グリーンコープ共同体、下郷農業協同組合、耶馬溪酪農組合の三者で基本協定を締結し、その後の状況について本年度の通常総会で報告していました。本日は、具体的に計画を進めていく中での現在の進捗状況を報告いたします。

組合員にとって産直びん牛乳は、食べものの運動の象徴です。私たち組合員がこの先

第二号議案

新たな産直びん牛乳事業の 価値と進捗状況報告

新たな産直びん牛乳の開発は、牛乳メーカーの判断によって、産直びん牛乳が存在できなくなることから始まりました。

2020年12月、雪印メグミルク(株)から突然、「2023年3月末をもって産直びん牛乳の製造を終了したい」との申し入れを受けました。

連合会理事会は、「産直」で「GM分別管理の飼料で育てた母牛の生乳(以下、GM分別管理の生乳)」で「パスチャライズ殺菌」の「びん牛乳

を継続したい、と考えてきました。それは、1970年代に「成分無調整の牛乳を共同飲用することから開始し、パスチャライズ殺菌、ノンホモゲナイズ処理、GM分別管理された飼料の給餌、そして、びんへの充填と、30年かけて一つひとつ、理想の牛乳をつくってきた到達点を守りたい、と

もずっと産直びん牛乳を飲み続けていくことができるように、新たな産直びん牛乳事業を進めます。下郷農協の酪農生産者とグリーンコープが連帯し、「真の産直びん牛乳」の生乳をつくるための酪農場として耶馬溪ファームをつくり、国産の飼料を製造するTMRセンターを建設しました。これから、組合員の願いを形にした「真の産直びん牛乳」を製造できるように、みんなで歩を進めていきます。

先日、びん牛乳工場を訪れる機会がありました。すでに建物は完成しており、ここで産直びん牛乳を製造できるのだと実感しました。

本日は、「真の産直びん牛乳」の誕生を共に願ひ、力強く前進していくための大切な場となることを、心から願っております。

いうことです。

びん牛乳の製造を終了する申し出を受けて以降、連合会理事会は、雪印メグミルクにびん牛乳の製造を継続することを強く、強く要請しました。

しかし、断られ続け、しかも、継続する場合は「紙パックに変更」と回答さ

が左右される構造が、続くことになる、ということだと考えました。

れました。次に、雪印メグミルクに代替メーカーの提案を求めました。しかし、「提案できる代替メーカーはない」ということでした。

グリーンコープは、この難局を乗り越える策として、「新たなメーカーを探して製造を委託す

さらに、2021年6月には、牛乳びんのメーカーから「2023年3月まで、びんの製造を終了する」と通知されました。その結果、グリーンコープの産直びん牛乳専用のびん(超軽量リユースびん)も手に入らないことになりました。

※遺伝子組み換えの混入を防ぐ分別生産流通管理

グリーンコープは、目の前の困難に対して、一つひとつできることに取り組んで、理想の食べものに向けて、商品の開発してきました。

1970年代初頭、グリーンコープ（の前身生協）が誕生しました。1940年代から化学物質が氾濫し、1950年代からの地球（地球システム）に悪影響を与え人間・生き物の生命と健康に被害を及ぼすような状況に対して、「環境や生命と共生する社会・フードシステム」をつくることを目指してきました。そのためコトコトでできることからできるだけ取り組んでいるのが、グリーンコープの「食べもの運動」です。

牛乳では、共同飲用から始まり、成分無調整牛乳を開発して、生産地を指定してパステライズ殺菌牛乳を実現しました。そして、ノンホモゲナイズ牛乳も開発して、生産者を指定して飼料のGM分別管理を実現し、2003年にびん装化しました。産直びん牛乳は、「グリーンコープの食べもの運動の象徴」です。したがって連合会理事会は、メーカーの都合と意思によって、産直びん牛乳が無くなることになるという事態に対して「産直」で「GM分別管理の生乳」で「パステライズ殺菌」の「びん牛乳」を継続したいと考え、できることとして、「びん牛乳工場を建設する」と考えました。この連合会理事会の判断は、グリーンコープを貫いているものです。

「食べもの」を生産するグリーンコープへと飛躍する画期となります。

グリーンコープは前身生協時代から、様々な課題に直面するたびに、自らが自分たちであり

は、メーカーの意思と判断で進まずに、自らの力で産直びん牛乳を供給できるようにするための「次の挑戦」として、生産・製造の主体となる意思を持ち、びん牛乳工場を建設すると判断しました。

生産・製造の主体となることとは、「投資する」ということです。びん牛乳工場は、土地（2400万円）・建物（248億円）・設備・機械等（44.1億円）に投資し、商品の製造原価として商品代に盛り込んで回収します。建物・設備・機械は、減価償却期間を終えた後も大切に使用できれば長持ちする。

産直びん牛乳のあり方と未来とは、かねてからの希望である「生乳の生産者との産直取引関係をつくる」ことを実現するということでもあります。

産直びん牛乳のあり方と未来とは、かねてからの希望である「生乳の生産者との産直取引関係をつくる」ことを実現するということでもあります。

酪農生産者との「真の産直」の取引関係をつくりたいと考えました。

2020年3月、組合員の共同購入による利益が組合員の利益として還元されることを目指し、現在の生乳の取引先である九州生乳販運 熊本県酪連に生乳の取引条件の改善について協議・交渉を申し入れました。

グリーンコープの組合員がパステライズ殺菌に使える生乳がなかなか存在しない時代に生乳数の少ない生乳の生産に向

下郷農協はグリーンコープにとって、連帯して取り組んでいきたいと考えられることができる農協です。

飲むヨーグルトなど、取引を増やしてきました。そして2021年春、産直びん牛乳が供給できなくなるかもしれないという事態を受けて、下郷農協と下郷農協の酪農生産者との話し合いを開始し、2021年7月「グリーンコープの産直びん牛乳に必要な生乳を生産する経産牛1000頭規模の酪農場の建設に取り組み計画を立てよう」と合意しました。

牛乳工場も、酪農場も、土地を確保し、建物を建設すればできます。しかしグリーンコープはそうは考えません。

以上4つの理念に基づいて、産直びん牛乳工場も、1000頭規模の酪農場も「地域の再生」につながる運動・事業として取り組んでいます。

グリーンコープと下郷農協、耶馬溪酪農組合との基本協定の内容（抜粋）

第一条
グリーンコープと下郷農協と耶馬溪酪農組合の三者は、互いに協力して、酪農業を基幹とした地域産業を興すなどにより、下郷を豊かな地域に再生していくことを目指す。

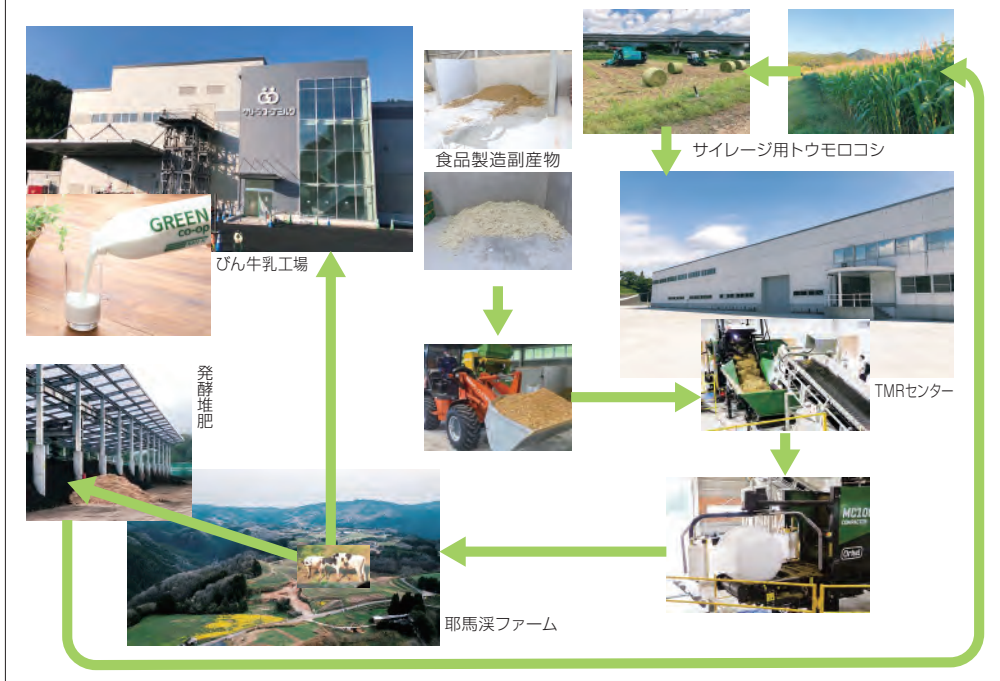
第二条
下郷の地をグリーンコープの組合員にして、牛乳をはじめとする食べものの故郷であると同時に、産地の里として、豊かに再生していくことを目指す。

第三条
グリーンコープの組合員に限らず、地域の消費者・市民にも開放されるものとする。

第四条
第一歩として、グリーンコープ・下郷農協・耶馬溪酪農組合は協力して、下郷の地に日本で最高の生産性と乳質を誇る酪農業を建設します。

第五条
投資の回収の進捗状況を見極めつつ、段階的に、グリーンコープの組合員に供給する牛乳などの乳製品の価格を引き下げていきます。最終的には、グリーンコープの組合員に供給する牛乳などの乳製品は必ず、日本一安い価格と高品質を実現します。

TMRセンターで飼料を製造し、循環型酪農を実現します



TMRセンターで飼料作物と食品製造副産物を使って完全混合発酵飼料を製造し、耶馬溪ファームの母牛の飼料にします。

グリーンコープの青果生産者の皆さんに飼料作物の生産を呼びかけ、また、新たに出会った作物を生産する農家が、サイレージ用トウモロコシ、WCS（稲発酵粗飼料）、通常は乾燥牧草として輸入しているイタリアンライグラスなどの牧草を生産します。自給する飼料を増やすことで輸入乾牧草を減らすことができ、飼料代の削減に大きく貢献します。

食品を製造する際に発生する副産物も原料に活用します。ほとんどの食べものが発酵飼料の原料に使えます。グリーンコープ商品のメーカーの皆さんにも相談して確保を進めています。

耶馬溪ファームではBMW技術を取り入れ牛の排泄物から堆肥をつくり、生産した堆肥は青果生産や飼料作物生産の現場で活かされます。

耶馬溪ファーム 全景外観イメージ



新びん牛乳工場「グリーンコープミルク」は、2025年3月10日に供給を開始します。

2024年12月、計画よりも早く工場建物が完成しました。製造機器を搬入して検査を行います。すべての機械を動かさせた点検に時間を要

完成した新びん牛乳工場



し、生乳を使ったテスト製造が2月中旬以降となります。供給開始は3月10日週（カタログGREEN51号）となる見込みです。

2025年1月～3月上旬、びん牛乳の供給がなくなりました。

以上の経過から、組合員の皆さまに、大変申し訳ない事態を発生させています。組合員の皆さまに継続して牛乳を供給したいと、雪印メグミルクや熊本県酪連と相談・協議しましたが、2025年1月から3月上旬までびん牛乳を供給すること

一歩後退しますが、次に大きく前進します。グリーンコープの「食べもの」運動は、生命の大きな循環をつくるものになります。

この4年間、ピンチに対して「一歩も後退せずに、前進するのみ」を実現することを目指してきました。具体的には、産直びん牛乳を途切れることなく供給することを目指して

してきました。現（2024年12月）段階で、一時期（2025年1月から2027年半ばまでの2年半、グリーンコープのびん牛乳がGM分別管理ではないびん牛乳になることになりました。グリーンコープは、このことは「一歩後退かもしれないが、大きく前進することにつながるもの」として、乗り越えていきたいと考えています。



TMRセンターで製造した飼料をおいしそうに食べる下郷農協 伊原牧場の牛

酪農経営の大きな課題は「飼料」です。酪農における最大のコストが飼料であり、輸入飼料が大幅に高騰しているため、日本の酪農は危機的状況です。

酪農を成功させ、産直びん牛乳事業を成功させるために重要な要素の一つは、飼料を国産で確保すること、飼料の価格を自分たちでコントロールして抑えられるようにすることです。

したがって、飼料代を最大限に自分たちでコントロールできるような、TMRセンターを建設することにしました。

トリールでできるように、TMRセンターを建設しました。TMRとは「Total Mixed Rations」の頭文字で「混合飼料」「完全飼料」などとも呼ばれます。TMRセンターは様々な飼料原料を配合して、搾乳のために必要な栄養を設計して飼料を製造します。適切な栄養管理の上で完全に配合された飼料が作られることによって、乳牛の体調、搾乳量、生乳の質を安定させることにつながります。また、TMRセンターの飼料を

利用することによって、酪農生産者は飼料を作ることや、飼料を給餌する労力・コストが大きく軽減されます。

2024年9月以降、原料の入荷が始まり、TMRセンターは10月11日から飼料の製造を開始しました。11月11日から耶馬溪酪農組合の生産者に供給を始めています。

TMRセンターを建設することは、自給飼料を生産する圃場を増やすことにつながり、その圃場に酪農場から排出される多くの堆肥を還元されるようになります。つまり、酪農の最大の悩みである堆肥の活用を促進します。

6月以降と考えなければならなくなりました。全ての牛乳を新たな産直びん牛乳にできるまでの期間を少しでも短縮することを酪農生産者と話し合うには、グリーンコープが酪農について理解し、酪農生産者から信頼される関係をつくらなければなりません。そのためはグリーンコープも酪農に携わって、酪農を知らなければならないと考えました。

グリーンコープが酪農に携わってことを提案したこと、酪農生産者も期間を短縮することを様々な

これまでの酪農生産者には、取引量を減らしていくことを理解・合意いただけませんでした。

2023年6月、これまでの酪農生産者である菊池の生産者への相談を開始しました。グリーンコープが新たなびん牛乳工場を建設するのを契機として、下郷の酪農生産者と「直接に取引する産直関係」を結びたいと伝え、生乳の取引を継続されない菊池の生産者には、2025年4月から1年間かけて徐々に乳量を減ら

第一号議案

牛乳びん不足事故に伴う
総括と損失の報告

2023年12月13日、グリーンコープ連合会
理事会に提出し検討した、連合会常勤理事会に
関する総括に基づいて報告します。

一、お詫び

牛乳びんの手配を誤る
という極めて単純な誤り
によって、グリーンコー
プの「食べもの運動の象
徴」と標榜するグリーン
コープのもっとも大切な
商品の一つである産直び
ん牛乳を、組合員の注文
に応じて供給できない事
態を発生させてしまいま
した。

組合員からの期待に応
えられないこと、供給責
任を果たせないこと、更
に、事業・経営に多大な
損害を発生させることを
引き起こしました。組合
員への最大奉仕が原則で
ある生活協同組合におい
て重大な事故を発生させ
ました。

このたびの事態を発生
させたことを、心よりお
詫び申し上げます。

二、事態を発生させた原因

2021年6月に、牛
乳びんメーカーから「2
022年12月で牛乳びん
の製造を中止し、202
3年3月で販売を中止す
る」との申し出を受けま
した。

当時グリーンコープ
は、新たな「産直びん牛
乳工場」の建設に取り組
むことを検討しており、

三、責任の所在

当該本部長の「自分だ
けで判断する」「報告し
ない」「深く考えない」「相
談しない」「外部からの
問い合わせなどにも応答
しない」というあり方が、
このたびの事態を引き起
こした発端です。

そして、このたびの事
態を引き起こした最大の
責任は、グリーンコープ
共同体専務理事（グリー
ンコープ連合会常務理事

2024年5月20日、連合会常勤理事会の
職場会議で処分を執行しました。

グリーンコープ連合会
常勤理事会は、連合会常
勤理事会の総括、連合会
専務理事から提出された
総括、共同体専務理事か
ら提出された総括の検討
を重ね、連合会常務理事
の処分（減給）、共同体
専務理事の処分（10日間
の出勤停止）、連合会専
務理事の処分（10日間の

出勤停止）、当該本部長
の処分（30日間の出勤停
止）を執行しました。
今後、本部長制を廃止
し、部長制とし、「共同体・
連合会専務・常務会」を
設置して、共同体・連合
会専務理事と常務理事が
生協連合会職員事務局を
総括します。

牛乳びんを不足させてしまったことに伴う損失

2023年度の連合会
の決算において、牛乳び
んの不足に伴って発生し
た損失は、1億1,652
万8,354円でした。

2024年9月決算
（上半期）と2024年度
下半期（10月以降）の損
失発生見通しは、3億6,
030万円と試算してい
ます（2024年10月現
在）。

2025年度は、20
24年度の終わり（20
25年3月中旬）から、新
たなびん牛乳工場で、新
たなりユースびんを使っ
てびん牛乳を製造します。

兼任）にあります。

四、伴う処分と対応

今後、組織を改革して
いく趣旨に基づいて、グ
リーンコープ共同体の専
務理事は辞任とします。

グリーンコープ連合会
常勤理事会の責任は重大
であり、現在の常勤理事
会を解体的に再編成し、
専務理事と常務理事の責
任を真に果たす構造にし
ます。

連合会第三十二期臨時総会 議案採決の結果			
代議員数	217人（議長と欠席者を除く）	賛成	反対 保留
第一号議案 牛乳びん不足事故に伴う総括と損失の報告	多数	8	18
第二号議案 新たな産直びん牛乳事業の価値と進捗状況報告	多数	2	9
第三号議案 議案決議効力発生の特	多数	1	2

当日質疑応答

牛乳びん不足事故について

Q…牛乳びんの在庫管理について、人の手に委ねるだけで
はなく、間違いを起こさないよう歯止めをかけるシス
テムはなかったのか。

A…難しい仕事だった訳ではなく、必要な本数を数えてメ
ーカーに発注すれば済む仕事だった。しかし担当した
本部長は、必要な本数をいい加減にメーカーに答え、
誰にも報告や相談をせずに独断でやり取りした。

グリーンコープではこれまで、すべてを専務や常務
に何うのではなく、その業務の責任を担う本部長に自
ら主体的に判断し対処する権限を持たせていたが、そ
の立場を勘違いさせてしまった。これが今回のことが
起きた最大の原因であり、そのように勘違いさせてし
まった組織構造であったことを反省している。

菊池の生産者への対応について

Q…新びん牛乳事業について、報道される前に菊池の生産
者に言えなかったのは、雪印メグミルクと秘密保持契
約を結んでいたからか。なぜ結んだのか。また、菊池
の生産者には正式にお詫びしたのか。

A…秘密保持契約は雪印メグミルクから提示された。まだ
決定していない事柄を他に漏らさないのは取引の基本
であるので尊重した。グリーンコープは、秘密保持契
約を守りつつ、何とか産直びん牛乳を継続できる方法
を考えて合意したいと、雪印メグミルクと半年間交渉
したが、雪印メグミルクの考えを変えることはできな
かった。

菊池の生産者の皆さんには、グリーンコープから説
明する前に他から聞くことになり、本当に申し訳なか
った。2023年6月に菊池の生産者に1回目の説明
を行った際に、きちんとお詫びをした。その上で、2
024年以降の生産について協議を進めた。

2025年1月～3月上旬に
びん牛乳が供給できなくなるについて

Q…1月からびん牛乳が供給されないことについて、本日
初めて話を聞いた。現場が心づもりをして組合員に対
応できるように、もう少し早く判断してほしかった。

A…何とかびん牛乳を継続したいと考えて交渉を続けたが
叶わなかった。もっと早く結論を下して情報を届ける
べきだったという指摘はそのとおりである。

経過としては、まず雪印メグミルクに1月から3月
まで一般生乳でびん牛乳を製造してほしいと相談した
が、生乳の菌数が管理できていないという理由で断ら

れた。菊池の生産者の生乳ならば菌数の管理ができる
ので製造可能ではないかと考え、熊本県酪連とも相談
したが断られた。雪印メグミルクに対して仮処分を行
うことを弁護士と相談したが、最終的に難しいと判断
した。

Q…「1月からは一般生乳を使用したびん牛乳を届ける」
と書かれたチラシや「共生の時代」号外がすでに組合
員に配布されている。1月から牛乳が届かなくなるこ
とについてはどのようにして知らせるのか。

A…12月16日週に全組合員にチラシでお知らせできるよう
に準備する。

ヨーグルトの今後について

Q…ヨーグルトは今後どうなるのか。

A…あホワイトヨーグルトは、そのまま継続となる。あみ
んな元気ヨーグルトとあ生乳たつぷりヨーグルトは、
2025年1月以降も現メーカーで製造するが、これ
までの菊池の生産者の生乳ではなく、一般の生乳を示
モゲナイズ処理した生乳で製造する。

産直びん牛乳を原料に使っている
商品メーカーへの対応について

Q…産直びん牛乳を原料に使った商品を製造するメーカー
への牛乳の供給はどうなるか。

A…事前に、一般の牛乳を使った製造へと原料の変更をお
願いし、準備を進めていただいている。

Q…商品の原料に使う一般の牛乳はグリーンコープが用意
するの。

A…現時点ではグリーンコープで手配ができないので、メ
ーカーに手配していただくことになる。

Q…メーカーが牛乳を自力で仕入れられない場合は、商品
の製造停止、もしくは廃番となる可能性もあるのか。
また、万一商品が廃番になった場合は組合員へどのよ
うにお知らせするの。

A…場合によっては商品の製造休止や、長期にわたれば廃
番せざるを得ない可能性もある。廃番となった場合は
カタログでお知らせする。

また、今後酪農が軌道に乗り牛乳を作る量以上の生
乳を手配できるようになった時は、取引先にグリーン
コープが牛乳を手配できることを伝え、その牛乳を使
つてもらうよう相談する。

以上

お問い合わせ：グリーンコープ生活協同組合連合会 092-2992-7970